
さくらゆき

文月まこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらゆき

【Nコード】

N8971Y

【作者名】

文月まこと

【あらすじ】

若宮和彦は、いつもある事に恐れ、必死に誤魔化しながら生きていた。

そんな中で、和彦は少女との出逢いが訪れる…。

その出逢いが、和彦の人生を大きく変える事に……。

さくらゆき 1話「逃亡開始」

自分の中は空っぽ。

世界が鮮やかな景色を見せている中で、自分の周りは何の色も見えない。

楽しい事も嬉しい事も何も無い、空っぽな自分。

そんな自分にもたった一つ、大切な場所がある。

悲しいとき。

辛いとき。

寂しいとき。

そんな時はいつも、あの場所へ行く。

その場所に行けば、暑い日は木陰になって、眠くなった時には心地よい風が吹く。

とてもお気に入りの場所。

そして、春にはいつも桜が咲いた。

その桜を見る度に、いつも泣きそうになる。

理由はよくわかっていない。

だけど、無性にその場所へと足を運んでいた。

何も無い自分が、大切にしている唯一の場所。

そんな自分を、いつも変わらずに慰めてくれるのも、桜の花びらだった。

右、左と確認して、誰もいない事を確認する。

若宮和彦は慣れた様子で、そっと自分の部屋から抜け出した。

自分にとっては、一日の中でどの時間が人の出入りが少ないかは、わかりきっている。

だから、部屋の脱出もかなりお手の物だ。

だが、それが得意になっても、悲しいだけだったが……。

「さ、飯の時間まで行くか」

和彦は無事に脱出できた嬉しさから、自然と足取りが軽くなった。

ふらふらと彷徨っていると、見知った顔が見えた。

いつもその女の子は、クマのぬいぐるみを抱えている。

そのぬいぐるみは、この女の子の相棒なのは和彦もよく知っている。

女の子はぬいぐるみを抱えたまま、窓の外を見つめていた。

「よ、理加ちゃん」

「お兄ちゃん……コホッ」

和彦の姿を見ると、理加は嬉しそうな顔を見せたが、すぐに咳き込んだ。

小さな子のそんな姿は、見ていて辛いものがある。

「あーあーあー、無理して喋らなくていい。咳酷いんだろ？」

「うん……。お薬飲んだんだけど……」

「じゃあ、ゆっくり寝ないとな……。眠れないのか？」

「だって、つまないんだもん。お兄ちゃんだって、寝てないじゃない」

「うわ、そう来たか」

小さくても女の子は、やっぱり鋭い。

見ていないようで見ていて、わかっていないようで、わかっている。

「な、理加ちゃん。理加ちゃんがお薬飲んだのは、何のため？」

「え……。飲めば、せきが止まるからって……」

「うん、そうだね……。咳が止まったら、身体も治るよ。そしたらさ、外に元気に遊びに行けるよ？」

「うん……」

「外で遊びたくない？」

「遊びたい……」

理加は再び、窓の外へと視線を移す。

そこには、理加と同世代の子達が元気よく走り回っていた。

理加だって本当はわかっている。

だが、頭で理解している事と心で思っている事は別なのだろう。

ただでさえ、遊びたい盛りなのに、こうした限られた生活は幼い子にはストレスになるのは、和彦にもよくわかっていた。

「なら、寝る？」

「寝る！！」

先程までとは違い、理加は勢いよく布団へと潜り込んだ。

その素直さに、和彦は思わず顔が綻ぶ。

理加はひょっこりと布団から顔を出して、和彦を見つめた。

「お兄ちゃんも寝なきゃだめだよ」

「ははっわかった。おやすみ、理加ちゃん」

「おやすみなさい……」

理加が目を閉じて少し経つと、規則正しい寝息が聞こえてくる。

薬が効いてきたのもあるが、やはり子供は寝つきがいい。

その寝つきの良さと素直さが、和彦には羨ましくなってくる。

昔は自分も理加のように、素直に信じる事が出来た筈なのに……。

いつからか信じる事を止めてしまった。

そうなってしまったのは、一体いつだったのかもう覚えていない。

「身体も……治る……か……」

宥めるためとはいえ、よく言ったものだと思つた。和彦は思う。

和彦は苦々しい思いを抱えながら、理加が眠る部屋を出ていた。

さくらゆき 2話「逃亡先」

「じつちゃん、起きてる？」

「また抜け出したのか……」

和彦の顔を見るなり、渋い顔をしていたのは年配である田口だった。

そんな田口の態度も和彦にとっては、日常そのものだ。

「だって、つまんねえからさ……」

「また、看護婦さんに怒られるぞ……。この前も散々怒られとっただろうが……」

「何で知ってんだよ……」

「この建物の中で怒られるもんは、お前しかおらんだろ」

「……………」

田口の言葉はもっともであり、和彦としては面白くない。

だが、そんな和彦の態度も、田口にとっては慣れているものだ。

「そうやって抜け出してばかりだと、良くなるもんもならんぞ」

「いいんだよ……俺は」

「若いくせに怠けるんじゃないっ」

田口の叱るような口調に、和彦は口を尖らせた。

「じつちゃんは……嫌になったりしないのかよ？」

「ワシか……？ワシはもういい年齢だからな」

「だから……もういいのか？」

「ある一定の年齢を迎えると、そう思うもんだ……。だが、お前にはまだ早いんじゃない……。だからお前がわかるようになるのは……大分先だ」

「わかりたくねえよ……」

和彦は田口の言葉をまたも苦々しく受け止めていた。

どうも建物の中にいると、あれこれ考えすぎる。

無意識に和彦の足は外へと向かっていた。

人が行き交う玄関口へと着くと、そこでも見知った人物を見かけ、自然とその人物へと近づいていく。

「あれ、和彦何やってんだ？」

「よ、茂」

和彦がひらひらと手を上げていると、目の前の高井 茂は何やら慌てた様子だ。

「お前、寝てなくていいのかよっ」

「飽きた」

「飽きたじゃねーよ。いいから寝てろ」

「病人扱いすんな」

「病人だろうが、お前は」

「……………」

それは不意に出た言葉だった。

それが失言だと気づいたのは数秒後で、双方に気まずい空気が流れる。

だが、和彦は気にした様子を出さずに笑って見せた。

「いいよ、事実だから」

「悪い……………」

茂は悪気があって言ったわけではなく、心配から出た言葉だとわかっている。

それに傍から見たら、自分はそういう位置づけになる事も。

「今日はどうした？」

気まずさを払拭するために、和彦から茂へ話を促す。

すると、茂は持っていた鞆から数冊のノートを取り出した。

「あ、ああつ。これ」

「お前もマメだな。留年してる奴のためにノート取るなんてよ」

「いくら留年してても、最低限の勉強は必要だろうが。いい歳して常識知らずは笑えねえぞ」

「まあな」

茂の指摘は当たっているだけに、和彦には耳が痛い。

「少しずつでいいからやっておけ」

「ああ……だけど、お前来年受験だろ。俺に気を遣ってないで自分の勉強しろ」

「俺の事はいいんだよ。これも復習になるしな」

「そうかよ」

茂の真面目さには頭が下がるが、それでも和彦にとっては有り難い事だった。

「外まで送るわ」

「あんな……。俺はここで帰るから、お前は部屋で休んでろ」

茂がそう言っただけで、玄関口へと向かえば、人込みで姿が混ざり、すぐに見えなくなる。

和彦はそこから目を離せずに、ジッと動けずにいた。

さくらゆき 3話「拠り所」

大和総合病院には、敷地の中心に桜の木が一本植えられている。

毎年綺麗に咲き続けており、今は丁度桜が咲くいい季節だ。

人々はその桜の花に魅了され、立ち寄る人も少なくはない。

和彦は、自然とその場所へと向かっていた。

その場所に早く着かない事がもどかしいが、少しでも早く間近で桜を見たかった。

そして早く、自分の心を落ち着かせたかった。

羨ましい、悔しい、辛い。

悲しい、寂しい、痛い。

自分の心を占めるのは、そのどれかが大半だった。

病気が治れば、家に帰れる理加が羨ましい。

何もかもを受け止めて、すでに覚悟している田口の事が寂しい。

普通の生活を送る茂を、見ていると悔しい。

そんな気持ちが、徐々に心を真っ黒に塗り潰していく。

少しでも心を真っ白にしたいくて、まっさらな気持ちになりたくて、桜を見たかった。

遠くから見える桜から、花びらが風に乗って和彦へと流れ込んできた。

それはまるで、別世界の案内のようでした。

その別世界に和彦は、少しずつ足を踏み入れる。

辿り着いた先には、素晴らしいものがあると信じていた。

そして、和彦がようやく木の傍に来ると、時間が止まった。

「……………」

ひらひらと、ひらひらと、桜の花びらが舞い散る。

その花びらの一つ一つが、地面へと落ちていく。

和彦は自然と、その花びらの行方を見つめていた。

その花びらの一つ一つが長い黒髪や、小柄な身体。

そして、顔へと落ちていく。

桜の花びらがその場所へと落ちる事が、当たり前のように決められており、今この場所だけが時が止まっていると感じる。

そこには……。

満開の桜の木の下で、桜の花に包まれた少女が眠っていた。

黒い服を身に纏うその少女は、目をかたく閉じたまま、動かない。

その光景は、今までいた世界から切り離されたような感覚に捉われ、和彦は少女に釘付けになっていた。

まるで一つの絵のように、ぴったりと収まっている。

こんな光景は、今まで知らない。

さくらゆき 4話「戸惑い」

「……………」

和彦の内から、熱くなり始めたのがわかった。

一体、この感覚はなんだろうか……。

身体が熱く、心がざわめく。

そわそわとして落ち着かず、視線を逸らせない。

この感覚は一体……？

和彦はいつまでもその光景を見ていたかったが、そうもいかない。

今はまだ、春とはいえ寒い。

何故この少女がここで寝ているのかは最大の謎だが、放っておくわけにはいかない。

ひよつとしたら、倒れているのかもしれないし、どこか気分が悪いのかもしれない。

幸い目の前には、病院がある。

しかし、行き交う人が大勢いて、少女の事は目に入っている筈なのに、誰も声をかけないのも不思議だ。

やはり、他人には関心がないのだろうか？

「もしもーし、大丈夫ですか？」

和彦が声をかけても、少女の反応はまるでない。

その表情をよく見ると、苦しい表情は見られずに、逆に寝息が聞こえてくる。

どうやら、本当に眠っているらしい。

和彦はしょうがなく、腰を落として少女へと近づく。

そしてその肩に触れると、少しひんやりしている気がした。

これは長い時間眠っていて、身体が冷えているんじゃないか？

そんな風に思い、和彦は再度少女を起こしにかかった。

「起きてくださいー。風邪引きますよ」

和彦は少女の身体を揺すりながら、耳元で呼びかける。

「ん……………」

ようやくの事で少女が反応したので、和彦も安堵するが、すぐに言葉に詰まってしまった。

少女がゆっくりと目を開くと、その大きなつぶらな瞳は少女をより際立たせた。

こういう容姿の女の子が美少女なのだと、遅れて和彦は理解する。

「あなた、何？」

「は？」

少女から出た言葉に、和彦は戸惑いを隠せない。

少女は和彦が傍にいる事に驚かず、無表情でそう告げた。

何？

何って何だ？

俺は何だっけきてるのか？

そもそも、俺って何だ？

すでに相当舞い上がっているのか、和彦の中では軽く混乱状態だ。

和彦はとりあえず息を吐いて、思いつくまま口にする。

「若宮和彦、歳は十八。この病院に入院中。好きなもの、食べれる物は何でも食べる。嫌いなもの、特になし。両親と俺との三人家族。ペットは柴犬のママ太。」

「……そう。」

少女のそっけない返事に、和彦は少しムツとした。

「そうって何だよ、聞いておいて」

「別に聞いてない。あなたが勝手に答えただけ」

「……………」

確かにその通りだった。

少女は率直に和彦の事を聞いただけで、和彦にそこまでの関心があるわけではない。

それを勝手に舞い上がって、ベラベラと喋ったのは和彦だった。

そんなやり取りに、和彦の頭は冷静さを取り戻す。

和彦は少女の隣に座り込むと、単刀直入に切り出した。

「こんなところで寝そべって何してんの？」

「見てわからない？」

「いや、わかるけど…………さ」

その格好を見れば、寝ていた事は理解できる。

和彦が知りたいのはそうではなくて、何故わざわざ、人通りが激しいこの場所で眠っているのかわからない。

そんな和彦の戸惑いが伝わったのか、少女は淡々と口にした。

「寝転がって桜を見たかった……。ただ、それだけ」

「桜を？」

「そう……。綺麗だから……」

「……………」

最早、何も言えなかった。

本当に意味などなく、寝転がって桜を見たかっただけのようだ。

その他に、何の意味もない。

豪快にも程があるだろう……。

さくらゆき 5話「不意打ち」

「桜、好きなの？」

「うん……………好き」

「っ……………」

今まで無表情だった少女の顔が、控えめに笑う。

その表情があまりにも綺麗で、和彦は一瞬見惚れた。

その事が少し悔しく、和彦はその事実気づかないフリをする。

「でも、こんな場所で寝てると風邪引くぜ」

「平気」

「平気じゃないだろ……………」

「私は平気なの」

やっとの事で少女は身体を起こすと、その身体のおちこちに桜の花びらがついていた。

少女は、その花びらを振り払っているが、多すぎてすぐには取れない。

その一生懸命な様子に、和彦は思わず吹き出していた。

「ほらっ、髪にもついてる」

和彦は少女の髪についた、いくつもの花びらを取ってやる。触れた髪は思っていたよりも柔らかく、さらさらしていた。

手が離れると、和彦は何故だか寂しいと感じていた。

「変な人」

「はあっ!?!どっちがだよ……」

いくら桜が綺麗だからって、こんな場所で寝転がっている方がよっぽど変だろう。

そんな少女に変だと言われ、和彦としては納得がいかない。

だが、それと同時に少女に興味があるのも事実だった。

閉鎖的な空間にいる自分にとって、目の前の少女はとても新鮮だ。

そのためか、和彦の口から自然と零れ落ちた。

「なあ、名前は?」

「……………」

「……………」

少女は何も応えない。

初対面で会った男に、いきなり名前を聞かれて警戒しているのだろうか？

自分でも唐突だとは思っ。

だが、それでも聞きたいと思っていた。

「……………みゆき」

渋々ながらもその名を教えて、みゆきは立ち上がった。

「帰る」

「そっか……………、またな。みゆき」

つい、そんな風に口にしたのは、和彦自身がまた会いたかったからかもしれない。

「……………」

みゆきはそんな和彦を一瞬だけ見つめ、そのまま何も言わずに歩き出していく。

和彦は、そんなみゆきの後ろ姿をいつまでも見つめていた。

さくらゆき 6話「色づくもの」

自分の部屋に戻ってきた和彦に待っていたのは、看護婦の怒りだった。

その険しい表情に、和彦は本気で逃げ出したくなった。

「和彦君つつ、また抜け出して」

「そ……そんなに怒らなくても……」

「和彦君！！」

「う……、すみません……」

和彦の言葉は、余計に怒らせる結果になってしまったようだ。

きつとまた、田口辺りに言われるだろうと頭の片隅で思う。

「まだ、外も寒い日が続くし、風邪を引く人だって沢山いるのよ。万が一体調に変化が起きたり、発作が起きたらどうするの……！」

「そこはほら……。大丈夫だったし……」

「そついう問題じゃありませんっ……！」

「はい……」

「いい？わかっていていると思うけど、発作が起きてすぐに対処しないと、危険な場合だってあります。何かあったからじゃ遅いのよ。そのためにもナースコールだってあるんですから……いいですか！」

「すみませんでした……」

看護婦の言葉に、和彦は素直に謝るしかなかった。

看護婦が部屋から出ると、訪れたのは静寂。

「危険な時……ね」

和彦はベッドの上に倒れこむと、ぼんやりと天井を見上げた。

仮に危険な状況に陥って最悪な状況になったとしても、一体誰が困るのか……。

和彦は自嘲的に笑いながら、どうしても考えてしまう事がある。

生きる事の意味が、わからない。

どうして生きているのか、わからない。

何が辛いのかも、わからない。

生きていて、何の意味があるのだろうか？

存在していて、何の意味があるのだろうか？

わからないまま生きているなら、いつそ消えた方が楽だと、思う時もある。

だけど、そうなれない自分にもどかしくて。

悲しくて、悔しくて。

ずっと、暗闇の中を歩いている感覚。

明るい光は、未だ見えないままだ。

このまま自分は消えていくのだろうか？

和彦がそんな負の感情に、捉われかけた時だった。

『あなた、何？』

「っ」

和彦の脳裏に今日出逢った少女、みゆきの姿が思い浮かぶ。

その事を思い出した途端、和彦を取り囲んでいた空気が変わった。

黒く塗り潰された心が、真っ白に変わっていく。

些細な出逢いだった筈が、和彦の心の中で確かに色づいて残っていた。

さくらゆき 7話「恋愛指南」

年寄りの話は長い。

そんな事を和彦は今身を持って、実感していた。

きっかけは、田口と田口の妻の馴れ初め話から始まった。

最初は興味本位で聞いていた和彦と理加だったが、その話の長さから疲れ始めていた。

「最初は一目惚れだったんじゃない……。妻と出逢ったのは……。一目惚れだったワシはとにかく、来る日も来る日もアタックし続けた……」

「それでよく諦めなかったな……」

「それ程、妻に惚れこんでいたからじゃ……。ワシの気持ちにようやく妻が応えてくれて……。付き合うことになったんじゃない……。妻の父親に結婚を反対されて……。認めてもらうために……。相応の時間がかかった……」

妻の話をしているうちに、田口の話に火が点いてしまった。

結婚の話から、自分の子供の話……。

そして、妻の話へと熱が入って止まらなくなった。

「妻は本当にいい女だった……。ワシにはもったいないくらいで……」

…美人で器量が良くて……な」

「……………」

「……………」

「聞いてるのか！」

反応がない和彦と理加に田口が叱責をする。

そんな田口の反応に呆れつつ、和彦は状況を説明した。

「じつちゃん……。理加ちゃん、寝ちゃったんだよ……………」

「なぬ!！」

田口が冷静さを取り戻すと、疲れた理加が完全に寝入ってしまったている。

「まだ話は途中なのに……………」

「さすがに疲れちゃったんだと思う……………」

和彦も結構疲れているくらいだ。

幼い理加には、もっと負担がかかっているだろう。

目の前の田口は……そんな事には全く気づいていない。

「しかし……そんなにいいもん？」

未だ女の子と付き合った事のない和彦にとって、田口の話は理解しづらい部分もあった。

一人の人間に、そこまで気持ちを傾けた事はない。

だから、よくわからない。

人が人を想う気持ちが……。

「何だ……？お前、気になる女もないのか？」

「は……？」

気になる女？

そう言われて、真っ先に思い浮かんだのは……。

『うん………好き』

そう控えめに笑っていた姿が、頭の中に過ぎる。

一度だけ会った少女、みゆきだった。

まてまて、一回会っただけだぞ……？

それにすごい変な子だったし……。

和彦の表情から読み取り、田口は確信していた。

「ほら……いるんじゃないか」

「はあ！？何でそうなるんだよっ」

田口の指摘に、和彦はさすがに驚いた。

「一体、何でそうなるのか……」。

自分がそういう話をしているからといって、こちらまで巻き込まないで欲しい。

気になるといえば…確かに気になる。

みゆきの行動は不思議で、とても目を惹く。

だが、それが恋愛感情に結びつくかは別だ。

「いいと思ったら、すぐに声をかけたほうがいいんじゃないかな……。わかっただな、和彦」

「だから……何でそうなるんだよ……」

和彦は田口の言葉を、うなだれる様に聞くしかなかった。

さくらゆき 8話「思わぬ組み合わせ」

「あら、和彦君っ」

「こんにちは」

理加の部屋へと来ると理加の姿は無く、代わりに理加の母親がいた。

何度か部屋を訪れている和彦は、すっかり顔なじみになっている。

「いつも、理加を気にかけてくれてありがとうね」

「いえ……。今日理加ちゃんは……?」

「今ちよっと、診察なのよ」

「そうですか……」

理加がいないのならば、今日は一旦出直そうかと思っていた時だった。

「そうそう、和彦君。折角だから持ってって」

「何をですか?」

「じれよ」

理加の母が取り出してきたのは、一つの小さな箱。

どこかの店の名前が箱に記載しており、和彦は嫌な予感がした。

「今日はちょっと多めにケーキを買ってきたの」

「え……と、その」

和彦は内心冷や汗が出た。

理加の母は好意で言ってくれているため、どうやって断ればいいのか迷ってしまふ。

だが、結局は何も思いつかないまま話が進んでいく。

「折角だからね。和彦君にもぜひ食べて欲しいのよ。理加がいつもお世話になってるし」

「はあ……」

押しの強い理加の母に根負けし、和彦は何も言えずに箱を受け取っていた。

「どうするか、これ……」

和彦は歩きながら、持っていた箱を見つめる。

箱に入っているのはケーキがいくつかで、和彦は困り果てていた。

好意で貰った物を処分するには、気が引ける。

だからといって、誰にあげればいいのか……。

小児科病棟の子たちに渡すには、数が足りない。

それは他の部屋の住人にも言える事で、変に揉め事は起こしたくはない。

「最悪、看護婦さんにも言うか」

看護婦に事情を話せば、きっと何とかしてくれるだろう。

一応今は、また部屋を抜け出している時なので、それは最終手段にしておく。

和彦が習慣である桜の木へと訪れると、そこには先客がいた。

その先客を見て、和彦は自然と顔が緩む。

黒い服で長い黒髪の姿は、遠くからでもよくわかった。

「さすがに今日は寝てないんだな」

「……もう、桜咲いてないから……」

今はもう、桜の木は葉桜に変わっていた。

みゆきはそんな桜の木を無表情で見つめ、佇んでいる。

和彦はそんなみゆきを見つめながら、重要な事を思いついた。

「みゆき、これ食べないか？」

「何？」

和彦が差し出した箱に、みゆきは首を傾げる。

みゆきはそのまま受け取って、箱を開けた。

「！！！」

「みゆき？」

「これ……は？」

「ああ。知り合いの人がくれたんだけど、俺食べれないからさ。どう処分しようかと困ってたんだ」

みゆきは和彦の説明を聞いているのかいないのか、ずっと視線はケキに注がれていた。

その見つめる目はキラキラとさせている。

先程までの無表情とは大違いだった。

「た、食べていいの？」

「むしろこっちがお願いしてるくらいだ」

みゆきはその場に腰を落とすと、箱に入っていた苺のショートケーキとフォークを取り出す。

そして、すぐにそれを口に運んだ。

「　　」

「みゆき？」

「おいしい……」

「そ……そっか」

ケーキを食べているみゆきは、本当に美味しそうに食べている。

普通にしている時は殆ど無表情なのに、ケーキを食べている今は、嬉しそうに笑っていた。

桜やケーキ。

みゆきは、好きなものに対しては素直なのかもしれない。

そんなみゆきの姿は和彦にとって、不意打ちだった。

和彦はそんな動揺した自分を誤魔化しながら、みゆきの姿を見つめている。

みゆきはケーキに夢中で、和彦の存在など気にも留めていない。

「まだあるから、こっちも食べていいよ」

「食べないの？」

「俺は食べれないからな。そんな俺よりも、喜んで食べてくれる人の方がいいに決まってる」

「うん……わかった」

みゆきは二個目のケーキを頬張り、嬉しそうに食べ続けていた。

「ふう……」

さすがにケーキ二個はきつかったらしい。

だがそれでも、みゆきは満足そうに見える。

そんなみゆきの姿に、和彦も満たされていくのがわかった。

「ありがとう、助かった」

「貰ったのは私なのに、どうしてあなたがお礼を言うの？」

みゆきの言葉はもっともで、和彦は苦笑した。

「俺は甘い物は食べれないんだ。身体に負担がかかるから……」

「負担？」

「ああ、甘いものだけじゃない。塩分とかも制限されてるんだ、俺は」

過度に取りすぎれば、身体に負担がかかる。

負担をかければ、きっとすぐに気分が悪くなってしまっただろう。

そんな自分の身体が恨めしくてならない。

だが、これは自分の事情であり、みゆきに話したところで気分が暗くなるだけだ。

「だから、みゆきがケーキを食べてくれて本当に助かった」

「うん、本当においしかった」

みゆきは先程食べたケーキを思い出しているのだろう。

その表情はとても穏やかなものに見える。

そんなみゆきは、和彦へと視線を向けてきた。

「ありがとう……和彦」

「……っ」

桜にでもない、ケーキにでもない。

確かに自分に向けて、みゆきは笑う。

初めてみゆきは、自分の名を口にした。

それだけで、和彦の中に甘いものが広がっていた。

さくらゆき 9話「クマは恩人」

「理加ちゃん？どうしたの？」

「お兄ちゃん……」

和彦が理加の部屋へと訪れると、理加のすすり泣く声が聞こえる。

理加の顔を見ると、予想通り目いっぱい涙を溜めていた。

「何かあったの？」

「クマちゃん……取られちゃった」

「誰に？」

「あきらくん」

あのクマは理加にとっての大事な相棒だ。

そのクマが取られたとなれば、理加が泣くのも頷ける。

「で、あきらはどこにいるって？」

「あっち……」

理加が指を指した方向は部屋の出入り口で、そこには小さな頭がこっそりと覗いていた。

もっとも、和彦からは丸見えだったが……。

クマを取り上げたものの、あきは理加が気になって仕方がないらしい。

これは、俗に言う好きな子いじめか……。

どうしたものかと考え、和彦はあきらがいる出入り口へと近づいていく。

近づくと案の定、あきらから睨まれた。

「ったく、返してやれよ」

「ふんっ、嫌だねっ」

「そんなことしてると、理加ちゃんに嫌われるぞ」

「……………」

和彦のその言葉にあきは少しだけ怯んだが、簡単には引けないらしい。

だが、このままにしておくわけにもいかない。

「ほらっ、返してやれ」

「嫌だって言ってるだろっ」

そう言ってしまうえば、あきは一目散に駆け出していく。

さすが子供、こういう時の行動は素早い。

「おい、走るな」

「へへーんだ……わわっ」

追いかけてくる和彦に気を取られて、前方不注意のあきらはクマを
持ったまま転んでいた。

「お……おい、大丈夫か？」

「いって……」

和彦が確認すると、あきらは無傷で済んでいた。

どうやらクマのお腹が、あきらを守ってくれていたらしい。

「全く……自分を乱暴にしたお前をクマが守ってくれたぞ」

「クマが……？」

「ああ。お前が怪我をしてないのは、クマが庇ってくれたからだ」

「……………」

あきらはクマをジッと見つめている。

その視線は熱心で、キラキラとさせている。

どつやらあきららの中では、クマが偉大に見えているようだ。

「だから……そんなお前の恩人をちゃんと元の持ち主に返してやれ」
「!！」

和彦が示した方向には、廊下での騒ぎが気になっていたのか、理加が部屋の出入り口から、ひょっこりと顔を出す。

あきららは理加へと近づいてくと、恩人であるクマを理加へと差し出した。

理加はクマを受け取ると、手放さないようにギュッと握り締める。

「じめんな……」

「うん……。あきらくんも大丈夫？」

「……そいつが守ってくれたから……」

「クマちゃん……、とっても優しいの」

「うん……」

和彦はそんな二人のやり取りを見届け、そっと部屋から離れていた。

「……っ、はぁ……、はぁ……っ」

和彦は胸を押さえながら、静かにその時を待つ。

こうしてじっとしていれば、そのうちにこの苦しみが無くなるのを長年の付き合いでわかっていた。

そしてその通り、徐々に呼吸は落ち着いてくる。

和彦は深い息を吐くと、ベッドの中で突っ伏していた。

「いつそ消えてくれ……」

生きるか死ぬかの瀬戸際にいる自分。

長い苦しみが続くなら、消えてなくなってしまう方がいいのに……。

それでもそうならない自分は、浅ましくも生に縋りつく。

そんな自分が、滑稽に思えてならなかった。

「！」

耳を澄ますと、部屋の外から足音が聞こえてくる。

足音が近づいてくると、和彦は何事もなかったように姿勢を正す。

弱った姿を誰にも見られたくないのは、自分の意地だった。

「よっ」

和彦が返事をする、現れたのは茂だった。

夏期講習の帰りなのか、夏休み中だというのに制服姿だった。

「勉強大変だな……。夏休みだつてのに……」

「夏休みだからだろ、そもそも受験生には夏休みなんてないようなもんだ」

やれやれと疲れきっている茂の姿さえ、和彦からは羨ましく思える。本来なら自分も茂と同じ立場の筈なのに、今の自分はベッドの中だ。

「もう、進路決めたのか？」

「一応は。経済学部とかには思ってる」

その答えは真面目な茂らしい。

茂ならばきつと合格するに違いないと、和彦は思えた。

「和彦は？」

「俺は……まだ未定だ」

「そうか……」

身体の事もあるが、それ以前にやりたい事が見つからない。

この身体で何をやればいいのか、思いつかない。

二人の空気が重くなった事に、茂は慌てて話を切り出した。

「そ……そういえばさ。この前、可愛い子と一緒にいたな」

「……」

みゆきの事か。

まさか、茂に見られているとは思わなかった。

「あの子も入院してんのか？」

「さあな……」

何で茂がそんな質問をしてきたのかはわからなかったが、みゆきの事を教えてやる気にはならなかった。

「何だ、よく知らないのか？」

「ああ……」

よく知らない。

確かにその通りだ。

知っているのは、名前と好きな物。

小柄な身体にさらさらと靡く長い髪。

着ている服は、何故かいつも黒だとか。

普段は何も関心がないように見えて、好きな物には優しく笑うとか。

そして声が、透き通るような声だとか。

それ以外の素性は何も知らない。

何で病院に来ているのかとか、どこに住んでいるのかとか何も知らない。

だけど、それでも心に残る。

みゆきの存在が、和彦の中で確実に棲みついていた。

もっと、笑った顔を見たい。

もっと、逢いたい。

そんな気持ちが湧き上がってくる事に、和彦は理解し始めていた。

誰にも知られずに、自分のだけの心に秘めておきたいとすら、思ってしまう。

「そうか……。また、逢えるといいな」

「ああ……」

黙ってしまった和彦に、茂は差し障りのない無難な言葉をくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8971y/>

さくらゆき

2011年11月26日23時50分発行